

2001-10-17

阿部哲夫

開発と地球環境

世界の現状

- 今や従来のような大量生産、大量消費、大量廃棄を前提としたライフスタイルを続けることは不可能
- 自由、平等、民主主義といった思想が世界的に伝播し、自由経済システムが世界規模で定着し始めると、全ての人、全ての国が成長を求めることになり、いわゆる節度ある経済開発はますます困難
- 発展途上国が急速な経済発展を求め、先進国がステイタス・クオを維持しようとする限り、いわゆる sustainable development など画餅にしかすぎない
- 地球は今後ますます狭隘化するため、経済発展、人口増加はますます環境への負荷を高め、環境問題は一層深刻化する

開発と地球環境を調和させるために

調和案を考え出すための方策

- 開発による環境破壊の深刻さについては、他のスマイル会メンバーに委ねるとして、筆者はこうした問題を考える際の考え方を、今までの経験に基づいて紹介したい。

成功例に学ぶ：

先行する成功例を研究し、問題解決のヒントを得るやり方。

明治以降日本が積極的に取り入れてきたアプローチ。また古来学ぶことに長けた日本に最適のアプローチ。

環境問題を含め依然日本の主流をなすアプローチ。

1980年代日本に遅れをとったアメリカが、その劣勢挽回のために徹底的に日本を研究し、成功を収めたアプローチ。

彼らは Best Demonstrated Practices として体系化させた。

現場に聞く：

前述の通り、日本では解決策を考えると先進国の策をお手本にしてきた。

特に日本のインテリにその傾向が多く見られる。

ところが日本の問題は必ずしもアメリカの問題と同一ではない。

従ってアメリカの解決策が日本に最適とは限らない。

危険なのはアメリカ式を金科玉条の策として崇め奉り、日本独自の策の誕生を押しやしてしまうこと。

最も大事なのは、現実即して解決策を探ること。

そのためには現場に入り、現場の良しとする策を見つけだすことが肝心。

現場に入ってみると、複雑に見えた問題でも案外簡単に解決策の見つかることが多い。

構造の解らないほどに複雑な問題については、川喜多二郎氏の提唱した KJ 法の有効なことがある。

理想型を考える：

その問題は本当はどうしたらよいのか、最初に皆で理想案を考えるやり方。

青臭いと考えられるかもしれないが、まず理想型を考える。

大体複雑で困難な問題ほど色々な考えがあり、議論はまとまらずエンドレスに議論は続く。どの問題にも理想論を展開する輩と現実論を主張する手合いがいる。話は平行線のまま。

貴重な時間、貴重なエネルギーが浪費される。

そこでまず理想案を考える。最初皆の能力を理想案の開発に傾注させる。

理想案はラフなデッサンのようなもの。全体のバランスを考えるのに最適。

全体の方向性を決めるのに最適。

しかる後にヒト、モノ、カネといった制約因子を考慮する。

理想案を考える課程で皆は創造的になっていることもあって、こうした制約因子を考える際にも創造的に、前向きに考える傾向がつよくなっている。

その上理想案は、今までこの世になかったものを生み出す道しるべ。

従来日本は、この新しいものを作り出す上で弱かった。

理想こそは、日本が新しいものを創造する際の強力なガイド役。

そこでまず理想型を考える。

ナドラー教授の提唱するワーク・デザイン参照。

歴史に聞く：

歴史は過去に現実に起こったことの記録。

勿論記録をまとめた人物の個性、思想によって大きく差の出ること多い。

それでも歴史は問題解決を考える際の大きな宝庫。

とりわけ日本は、狭隘な国土で工業化を強行したために公害問題先鋭化。

また江戸時代には、開拓すべきフロンティア、廃棄物を廃棄すべきフロンティアがなかった。その中で高度のリサイクル社会を確立、約 250 年に亘って 3000 万人の人間を養い続けた。

江戸時代は、まさしく我々が、この限りある地球の環境問題を考える上で有効な、壮大な実験だった。

海外の人々にとっても大いに貴重な情報。是非とも纏めて世界に紹介すべし。

イチローの活躍はアメリカ人の日本人観を大きく変えた。

江戸時代のリサイクル・システム、ライフスタイルも、彼らの日本人観を大きくポジティブに変える。

総合的・創造的アプローチ：

以上四つの方策は多分に重複したところもあり、いずれか一つの方策だけで 100%の解を得ることは不可能。

複数の方策を適宜使い分けて、創造的に解を求める工夫が肝要。

ライフスタイルの変革

—日本は、明治以降西欧を中心とした植民地主義の動きに巻き込まれないため、西欧先進国以上に急速な工業化を進めた。そのため激しい環境破壊を惹起させた。

狭隘な国土が濃密な環境破壊を加速させた。

—幸いにして日本は世界第二の経済大国になり、国民の生活レベルも飛躍的に向上。しかしアメリカ流の大量生産、大量消費、大量廃棄のライフスタイルを導入、これに汚染されてしまった。

—今やこのライフスタイルは立ちゆかない。

—もともと江戸時代などに見られる日本のライフスタイルは簡素で、その上農業を基盤とする経済は、高度に発達したリサイクル・システムに支えられ、ものを大切にする文化を育んできた。

—ここまで発展を遂げた日本は、これ以上量的な拡大を図ることを抑制し、その分環境との調和、発展を必用とする途上国との融和に努力すべきである。

長い目で見れば、それが世界のためだし、日本のためになる。

—ものを大事にすると言うこと言えば、現在金融機関などが、木造住宅の耐用年数を一

律に 30 年としていることなどは大いに問題である。

大事に手を入れて使ってきた住宅も、そうでない住宅も一律に寿命 30 年として査定している彼らの慣行は、ものを大事にしようとする社会の要請に反する反社会的行為。

日本でも江戸時代、明治時代に建てられた家屋が、今でも立派に使われている。

アメリカでも東海岸などでは、100 年以上も経った木造住宅は、社会からも認められ、住民も誇らしげに使っている。

—最近医療の分野では、従来慢性病と言われてきた疾患を生活習慣病と呼び慣らすようになってきた。慢性病とは、長年の生活習慣に起因するというのがその理由。

環境問題も同様。飽くなき欲望を満足させている。環境も人間の体同様長い間にはひずみも生じてくる。

日本の果たすべき役割

—前述の通り、日本は、江戸時代に約 250 年に亘って鎖国を続け、その間約 3000 万人の高度に発展した国を維持した実績あり。

この間に開発、蓄積されたりサイクルなどのシステム、ノウハウには、250 年の実績の裏付けがあり、世界的に貴重な財産。

—日本には、伊勢神宮の 20 年遷宮に見られるような、森林を維持管理し、技術を伝承させるシステムを定着させた知恵あり。

—近年にあっては、CVCC エンジンなどの軽公害エンジンなどの開発で、世界をリードしてきた実績あり。

—これらの経験、実績の上に、日本は過去百数十年のうちに驚異的な発展を遂げ、今や世界最高水準のヒト、モノ、カネを蓄積した。

—これら日本が蓄積してきたりサイクルなどのノウハウ、シンプルなライフスタイルなどを組織的にまとめ、整理し、それらを海外に対しても積極的に紹介、発信すること。

日本食が海外で再評価され、いつの間にか海外の食生活に取り入れられ、ステイタスシンボル化していることに注目しよう。

いつまでも西欧の後追いを続けるとか、海外で評価されてはじめて自国の持ち味に気がつくとか言った、みっともない伝統からはそろそろ卒業しよう。

—日本のライフスタイルは、日本の文化に根ざした日本独自のもの。他の国々では思いつかないものがある。自信を持って紹介しよう。日本の実績に比べ日本からの発信はいかにも乏しい。

—このままでは日本は正当に評価されない。むしろ誤解される。

経験、情報を交換すること、シェアしあうことは、国際化の時代、グローバル化の時代

のキーワード。

—極東の、ヒト以外にこれといった資源のない小国がここまで発展するとは、誰も思わなかった。海外の人間も日本人も。日本人は今までの実績に対して自信を持とう。今後の可能性に対しても自信を持とう。

—開発と環境の問題についても日本の蓄積はかなりのもの。発信しよう。

農業の再評価

—日本が成長する過程で工業化を進めることはやむを得ないことであった。しかし工業化は半ば必然的に環境破壊をもたらした。ここまで経済が発展し、社会が豊かになってくると、工業化のプラスの面とマイナスの面とを比較検討し、工業化を適宜抑制することも必要になってくる。

—その上多くの先進国では、過剰生産が問題となり、そのためもあって過剰労働力が深刻な社会問題化する場合が少なくない。このため早期退職とかレイオフとかが先進国共通の問題となりつつある。

—この余剰労働力を吸収するのが農業である。農業は、特に環境に優しい農業は、労働集約的な産業。格好の吸収策。

農薬とか化学肥料の使用を抑えた農業は、基本的に環境フレンドリーであり、人々に健康な生活をもたらす。

—日本最初の宇宙飛行士・秋山豊寛も、宇宙から地球を見た後、ライフスタイルの変更を強調するようになり、農のある暮らしへの共感を明らかにしている。

国による環境破壊

—国、国家は元々国民のために存在するもののはずである。ところが逆の存在になっているケースが多い。

—公共事業：

最近日本の至る所で見られる河川工事などは、その最たるものである。もと もとは治水目的で始められたものであろうが、そのうち土建会社の金儲け、政治家の票集め、金集めの手段と化してしまった。

今では河川工事は、治水と言うよりは総体的に保水力を低下させることが多く、多分に自然破壊的になっている傾向が強そうである。

国民から集めた血税を、国民のために使うのではなく、環境を破壊するために使うというのでは、背任行為と批判されてもやむを得まい。

—戦争：

広島、長崎での原爆使用、ベトナムでの枯れ葉作戦、地雷敷設問題などの例を挙げるまでもなく、戦争は国の関与する最も悪質な環境破壊である。戦争防止の努力は環境保全の努力と同じ。

—原子力発電：

エネルギー源の確保を謳い文句に、国の強いバックアップを受けて原子力発電事業が進められてきているが、その進め方は一昔前の“よらしむべし、知らしむべからず”方式そのまま、とても国民の信頼を勝ち取るようにはなっていない。今時国民のサポートの得られない国家プロジェクトの成功する可能性は低いと言わざるを得ない。国民の理解を得る努力を欠いたプロジェクトは、環境破壊で終わる危険性が低くない。

取り敢えずの結語—我々の実行すべきこと、実行できること

—2001年の大半をかけて我々スマイル会は環境問題を取り上げてきた。その取り敢えずのまとめとしてこのホームページを立ち上げたが、単に勉強したことをまとめるだけではなく、多少なりとも実行する意味があり、また実行できることがあれば、と筆者なりに考えてきた。

—極くラフに言うと、人類はまず森林を破壊して農業を拡大し、ついで経済的な生産性を高めるために、その農業さえも縮小させて工業を拡大、自然を破壊してきた、といえそうである。

—富山和子によると、環境保全のポイントは土壌を作り、木を植え、森林を作ること、あるいはその活動を支援することのようである。これに類したことは、何人かのメンバーの報告でも指摘されていた。

—植林の手伝いであれば我々にもできそうだ。

—“植林”の手伝いをすること。これを当面の我々の行動指針にしたいと思う。

参考文献：

大江戸リサイクル事情：石川 英輔：講談社

江戸の経済システム：鈴木 浩三：日本経済新聞社

宇宙と大地：秋山 豊寛：岩波書店

ゼロエミッションと日本経済：三橋 規宏：岩波新書

環境問題とは何か：富山和子：PHP 新書

危機に立つ人間環境：田坂 興亜：光村教育図書

文化の経済学：荒井 一博：文春親書

森を守る文明-支配する文明：安田 喜憲：PHP 新書

日本多神教の風土：久保田 展弘：PHP 新書

深い泉の国-日本：トマス・インモース*加藤 恭子：中公文庫

沖縄文化論：岡本 太郎：中公文庫

浪費するアメリカ人：ジュリエット・B・ショア：岩波書店

幸せって何だろうー環境問題で問われているのは価値観そのものです：

高見裕一：毎日新聞 01-1-9

道元の“少欲知足”の心を：立松 和平：毎日新聞 01-1-15

21 世紀・世界の中の日本・多極化の裏で孤立の危機：サミュエル・ハンチントン：日経新聞 01-1-7

自由こそ独創の源：中村 修三：日経新聞 01-1-8

冒険心を育む社会に：武田 国男：日経新聞 01-1-6

日本産業が明るい理由：永岡 文庸：日経新聞 01-1-14

Sustainable Growth: The Economist, Jan.27,2001

以上